

[原 著]

ブラインドサッカー体験が小学生の視覚障害者観に与える影響について

相川 貴裕¹・加地 信幸¹・河野 喬¹・升本 絢也¹・東川 安雄¹

The Influence of Blind Soccer Experiences on Elementary School Students' Perception of the Visually Impaired

Takahiro AIKAWA, Nobuyuki KAJI, Takashi KAWANO,

Junya MASUMOTO, Yasuo HIGASHIKAWA

Abstract

We conducted a survey and research on how the perception of the visually impaired changes by holding a hands-on event with blind soccer players who have participated in the Paralympic Games for elementary school students. All of the target elementary school students had no experience playing sports or blind soccer with the visually impaired. As a result of the questionnaire survey before and after the hands-on class, there was a positive change in the image of the visually impaired in 8 items of 11 items. This study suggests that the view of the visually impaired changes positively when elementary school students experience blind soccer with visually impaired people. In the future, it will be an issue to investigate and study the extent to which the view of the visually impaired is maintained and the changes in the view of people with disabilities in other sports.

Keywords:

ブラインドサッカー (Blind soccer), 視覚障害 (Visually impaired), インクルーシブ教育 (Inclusive education), 小学生 (Elementary school student)

I 緒言

2021年に実施されたTOKYO2020パラリンピック大会によって障害者スポーツの関心は高まっている。スポーツ庁によるオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開授業 (2020)¹⁾ や学校独自のパラリンピックに関する教育活動が実践され、障害理解教育に用いられている。

障害者理解教育の重要性は、中央教育審議会初

等中等教育分科会 (2012)²⁾ による、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進に必要なものとして挙げられている。楠ら (2012)³⁾ は、「障害理解教育について、インクルーシブな教育制度を確保することが必要とされていることに伴い、今後障害のある児童又は生徒が通常の学級で学ぶ機会が増加することが考えられている」と報告している。また、小学校学習指導要領 (文部科学省, 2017)⁴⁾

¹ 広島文化学園大学人間健康学部

(Faculty of Human Health Science, Hiroshima Bunka Gakuen University)

は「障害のある幼児児童との交流及び共同学習の機会を設け、共に尊重しあいながら協働して生活していく態度を育むようにすること（第1章総則）」や、「障害のある幼児児童生徒の交流及び共同学習の機会を通して、協働することや他者の役に立ったり社会に貢献したりすることの喜びを得られる活動を充実すること（第6章特別活動）」と示している。これらのことから、これまで以上に「交流及び共同学習」が目的を持ち、学校教育の中で取り入れられることが推測される。「交流及び共同学習」を円滑に進めるためには、障害についての知識や障害のある子どもたちへの理解を促すための事前学習が必要とされている（全国特別支援教育推進連盟，2007）⁵⁾。

しかしながら、内閣府が実施した障害者に関する世論調査（2017）⁶⁾では、「あなたは、世の中には障害のある人に対して、障害を理由とする差別や偏見があるとおもいますか。」という問いに83.9%が「あると思う」と回答しており、障害理解教育が成果を出しているとは言い難い。

この原因の1つとして視覚障害理解教育に関しては、障害のシミュレーション体験の方法による問題があると考えられている。目隠しなどをして視覚障害体験を行うことで、「できない」「怖さ」を感じてしまい、視覚障害者観をゆがめてしまっていると考えられる⁷⁾⁸⁾⁹⁾。しかしながら、できることを体験する視覚障害シミュレーション体験は有効であるという報告¹⁰⁾¹¹⁾¹²⁾もあり、体験の内容や実施方法を検討することが重要であると考えられる。

また、障害者観の肯定的な変容には、障害者との交流が有効であることが示唆されており¹³⁾¹⁴⁾、視覚障害シミュレーション体験においても視覚障害者当事者とともに体験を行うことが重要であると考えられる。

また、障害理解教育には、体育・スポーツ活動が有効であるという先行研究が多くみられる¹⁵⁾¹⁶⁾¹⁷⁾。しかし、スポーツ庁によるオリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業実践事例集（2020）¹⁾をみると、映像や新聞、インターネット等から情報収集したものを発表する形態が多く、

視覚障害パラアスリートと一緒に実際の競技を実施している場面は少なく、小学生が視覚障害者パラアスリートと体験しているものはみられない。そこで、本研究では視覚障害者観の変容において実際に視覚障害パラアスリートと競技を行うことが重要であると考えられる。

また、障害理解教育は、特に小学生時代に体験することで効果的であると言われており¹⁸⁾¹⁹⁾、小学生に対して視覚障害者と体験型の体育の授業を実施することで、視覚障害者の肯定的イメージが増加するなど視覚障害者観の肯定的変容が見られ、障害理解教育に有効な活動であると考えた。

ブラインドサッカーを選択したのは、視覚障害者スポーツの中では、ゴールボールとともにパラリンピックで実施される団体競技であり、視覚障害者スポーツの中では、認知度が高く²⁰⁾、アイマスクを用意するだけで体験できる²¹⁾ためである。また、大学生を対象とした先行研究において、視覚障害者観の肯定的変容に有効であるという研究があるためである²²⁾²³⁾。

そこで本研究は、特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会（以下：JBFA）の協力を得て、パラリンピックに出場経験のあるブラインドサッカー選手とJBFAスタッフとともにブラインドサッカーを体育の授業内で体験することで、小学生の視覚障害者観がどのような変容をみせるかを調査・研究することを目的とした。

II 方法

1. 調査対象と方法

対象者は広島県A郡S町の小学校4年生（17名）および6年生（44名）の61名である。

調査は、小学生に対してブラインドサッカーの体験型授業を学年別に2コマ（90分間）実施し、その前後で視覚障害者への意識に関する質問紙調査を実施し、授業後のみ体験してみたの感想についても調査した。体験授業は2022年9月の同一日に実施し、調査は体験授業当日の前後に行った。

なお、本研究は、広島文化学園大学人間健康学

表1 ブラインドサッカー体験授業内容

時間	体験会内容	備考
5分	挨拶・体験内容説明	
15分	準備体操	ペアで実施。 アイマスクをした相手に声のみで指示する(図1)。
15分	ウォーキング・ランニング	グループで実施。 安全な姿勢や声を出すことの重要性を指示する(図2)。
10分	休憩	
15分	ウォーキング・ランニング	休憩前と同様。 グループで実施。
30分	ボールを使った運動 ドリブル・パス・シュート	定期的に話し合いの場を持ち、どうすれば効率よくボールを運べるか、目的の場所に蹴ることができるかなどを話し合う(図3)。
5分	まとめ・挨拶	



図1：準備体操



図3：シュート



図2：ウォーキング

(図1, 2, 3)。

3. 調査項目

調査項目は、表2に示す通り、「1. 基本項目」、「2. 障害者との接触抵抗感」、「3. 障害者との今後の関り」、「4. 障害児者のイメージ」、「5. 授業の感想」である。

基本項目は、性別、視覚障害者とのスポーツ体験の有無、ブラインドサッカー経験の有無、障害者との接触経験の有無、接触した障害者の障害種について確認した。接触抵抗感は、「障害者とかかわることについてどう思いますか」という設問で、「1. 抵抗がある」、「2. 少し抵抗がある」、「3. どちらともいえない」、「4. あまり抵抗はない」、「5. 抵抗はない」の5件法によって回答を得た。障害者との今後の関りについては、「障害児者と今後かわってみたいですか」という設問について、「1. とても思う」、「2. 少し思う」、「3. どちらとも言えない」、「4. あまり思わな

部研究倫理委員会の承認を受け、対象者、教育委員会、担任教諭に文面にて研究の主旨を説明し、同意を得て実施した。

2. 体験内容

ブラインドサッカー体験の授業は、2コマ(90分間)で、内容は表1のとおりである。JBFAのファシリテーター1名と選手1名によって実施された

表2 アンケート項目

項目	アンケート内容	回答
1 基本項目 (体験会前)	① 性別 ② 障害者との接触経験の有無 ③ ブラインドサッカー体験の有無 ④ 視覚障害者とのブラインドサッカー体験の有無	① 男性, 女性 ② あり, なし ※ありの場合は回数 ③ あり, なし ※ありの場合は回数 ④ あり, なし ※ありの場合は回数
2 障害者との接触抵抗感 (体験会前後)	障害者とかかわることについてどう思いますか	1. 抵抗がある, 2. 少し抵抗がある, 3. どちらともいえない, 4. あまり抵抗はない, 5. 抵抗はない, 6. もともと抵抗はない
3 障害者との今後の関り (体験会前後)	障害児者と今後もかわってみたいですか	1. とても思う, 2. 少し思う, 3. どちらとも言えない, 4. あまり思わない, 5. まったく思わない
4 障害児者のイメージ (体験会前後)	以下のイメージについてどう思うか。 ① かわいそう ② 暗い感じ ③ こわい感じ ④ 元気がない ⑤ 生活するのが難しい ⑥ 一人では何もできない ⑦ 一緒に生活するのは難しい ⑧ 障害がなくてよかった ⑨ 困っている時は助けたい ⑩ スポーツするのは危ない ⑪ 一緒にスポーツするのは難しい	1. とてもそう思う, 2. 少しそう思う, 3. どちらとも言えない, 4. あまり思わない, 5. まったく思わない
5 授業の感想 (体験会后)	・授業を通しての感想について書いてください。	・自由記述

い, 「5. まったく思わない」の5件法により回答を得た。障害者イメージは, 先行研究¹⁸⁾を参考として11項目設定し, 「1. とてもそう思う」, 「2. 少しそう思う」, 「3. どちらとも言えない」, 「4. あまり思わない」, 「5. まったく思わない」の5件法によって回答を得た。授業の感想は, 他の項目とは調査紙を別にし, 自由記述によって回答を得た。記述内容の誘導や限定を避けるため, 「授業を通しての感想」というテーマのみ提示し, 字数や体裁, 内容については全て任意とした。

4. 分析

基本項目は, 単純集計によってまとめた。

接触抵抗感については, 「1. 抵抗がある」を「1点」, 「2. 少し抵抗がある」を「2点」, 「3. どちらともいえない」を「3点」, 「4. あまり抵抗はない」を「4点」, 「5. 抵抗はない」を「5点」と換算し, Wilcoxon の符号付き順位検定によることによって授業前後を比較した。

障害者との今後の関りについては, 「1. とて

も思う」を「1点」, 「2. 少し思う」を「2点」, 「3. どちらとも言えない」を「3点」, 「4. あまり思わない」を「4点」, 「5. まったく思わない」を「5点」と換算し, Wilcoxon の符号付き順位検定によることによって授業前後を比較した。

障害児者のイメージは, 主に偏見や否定的イメージについては, 「1. とてもそう思う」を「1点」, 「2. 少しそう思う」を「2点」, 「3. どちらとも言えない」を「3点」, 「4. あまり思わない」を「4点」, 「5. まったく思わない」を「5点」と換算し, Wilcoxonの符号付き順位検定によることによって授業前後を比較した。

授業の感想は, テキストを質的に分析した大山(2015)の手法を参考に, 記述内容の意味のまとまりごとに整理した²⁴⁾。

データの集積・統計的処理にはIBM SPSS Statistics version27を用いた。

Ⅲ 結果

1. 基本項目

回答者の性別は、女子が32名 (52.5%)、男子が29名 (47.5%) であり、障害者との接触経験がある者は10名 (16.4%)、ない者は 51名 (83.6%) であった。参加者全員が視覚障害者とスポーツ体験をしたことも、ブラインドサッカーを体験したこともなかった。

2. 障害者と接触することの抵抗感の変化

接触抵抗感の得点を授業前後で比較したところ、授業前3.79 (SD : 1.133)、授業後4.06 (SD : 1.129) であり、有意な得点差は生じていなかった (N=61)。

3. 障害者との今後の関り

障害者との今後の関りの得点を授業前後で比較したところ、授業前2.45 (SD : 1.066)、授業後1.97 (SD : .975) であり、有意な得点差は生じていなかった (N=61)。

4. 障害児者のイメージ

障害児者のイメージについての授業前後の平均得点の比較結果は表3の通りである。Wilcoxonの符号付き順位検定の結果、「①かわいそう」、「②暗い感じ」、「③こわい感じ」、「④元気がない」、「⑤生活するのが難しい」、「⑦一緒に生活は困難」、「⑩スポーツするのはあぶない」、「⑪一緒にスポーツは困難」の8項目が、1%水準の有意差が生じていた。その他の3項目においては、「⑨こまっているときは助けたい」を除いて、肯定的な回答が増加していたが、有意な得点差が生じていなかった。

5. 感想

ブラインドサッカー体験型授業の後に、「ブラインドサッカーをやってみて、どう思いましたか。」と取り組んでみての感想を自由記述で回答を得た。

最も多い回答は「楽しかった」(N=27)という感想で、次いで「難しかった」(N=25)、「怖かった」(N=10)が続いた。難しかった、怖かった以外の

表3 体験授業前後の障害者イメージ統計結果 (N=61)

質問項目		平均値	標準偏差	z	p
① かわいそう	前	2.27	1.203	-3.945 ^b	<.001
	後	3.00	1.293		
② 暗い感じ	前	3.32	1.388	-4.426 ^b	<.001
	後	4.16	1.231		
③ こわい感じ	前	3.97	1.116	-2.536 ^b	<.001
	後	4.32	1.212		
④ 元気がない	前	3.50	1.184	-4.693 ^b	<.001
	後	4.31	1.154		
⑤ 生活するのが難しい	前	1.81	.846	-5.297 ^b	<.001
	後	2.87	1.241		
⑥ ひとりでは何もできない	前	2.81	1.157	-1.164 ^b	=.244
	後	3.00	1.268		
⑦ 一緒に生活は困難	前	2.85	1.129	-3.628 ^b	<.001
	後	3.50	1.170		
⑧ 障害がなくてよかった	前	1.66	.940	-1.876 ^b	=.061
	後	1.94	1.129		
⑨ こまっているときは助けたい	前	1.44	.643	-1.458 ^c	=.145
	後	1.32	.864		
⑩ スポーツするのはあぶない	前	2.55	1.197	-3.996 ^b	<.001
	後	3.39	1.233		
⑪ 一緒にスポーツは困難	前	2.98	1.121	-4.847 ^b	<.001
	後	3.87	1.261		

※Wilcoxon の符号付き順位検定による

- b. 負の順位に基づく
- c. 正の順位に基づく

回答は、「またやってみたい」、「選手はすごい」など肯定的な回答のみであった。また、「声を出すことの重要性」や「助け合うことの重要性」についての記載も見られた。

IV 考察

視覚障害者理解教育においても、他の障害者理解教育の先行研究¹⁸⁾¹⁹⁾と同様に、小学生年代に障害者当事者とともに体験型授業を行うことで、障害者の関りやイメージは肯定的に変化することが示唆された。障害者イメージが固定化される前に、障害者当事者とともに障害者理解教育を実施していくことが重要であると考えられる。

視覚障害者のイメージについては、11項目中8項目で統計的に有意な肯定的な変化があった。これは先行研究¹⁸⁾²⁴⁾と比較すると大きく変化している。パラリンピックに出場した視覚障害者当事者が講師を務めた点や小学生年代という障害理解教育に有効な年代を選択して実施した点によるものであると考えられる。統計的有意差はみられなかったが、「⑨困っている時は助けたい」の項目についてのみ、肯定的回答が減少した。これは視覚障害者当事者が講師を務め、自由に体育館内を動き回っている姿を見ることで、困っている場面がほとんどなかったためであると考えられる。

自由記述に多く見られる「怖さ」は、ブラインドサッカーが接触のある競技のためであり、ゴールボールなどの非接触型競技を実施すると恐怖心は減少すると考えられる。視覚障害者に対する「怖さ」は、障害者のイメージ「③こわい感じ」の肯定的回答が統計的有意に増加しており、減少していることが示唆された。他の自由記述では「怖い」以外は「難しい」という言葉は散見されるが、それ以外はすべて肯定的な記述であり、自由記述をみても視覚障害者のイメージは肯定的に変化したことが示唆された。

よって、視覚障害者とのブラインドサッカー体験型授業によって、視覚障害者に対するイメージが肯定的に変化すると考えられる。

全員が初めての視覚障害者とスポーツを行ったこと、全員が初めてのブラインドサッカー体験であったことは、障害者理解教育に重要な障害者当事者と活動する場が少ないことが示唆された。早期に障害者理解教育を行うことが障害者理解につながることから¹⁸⁾¹⁹⁾、今後JBFA等視覚障害者スポーツ団体と連携し、視覚障害者スポーツ体験会を積極的に実施していく必要があると考えられる。

V 今後の課題

今後は、本研究で実施した体験型授業により肯定的に変化した視覚障害者観が、体験型授業後どのように変化するかを調査・検討する必要があると考えられる。また、視覚障害者との体験型授業を複数回行った際の変化や視覚障害者スポーツの種目を変更した際の視覚障害者観の変化について調査・研究していくことも必要であると考えられる。そして考察にも記載したが、本研究から視覚障害者とのスポーツ体験や視覚障害者スポーツの体験の機会が少ないことが示唆されるため、インクルーシブ教育の推進に向け、体験会等の障害者理解教育の機会を創出していくことも課題であると考えられる。

謝辞

本研究にご協力をいただきました、坂町教育委員様、坂町立横浜小学校様、坂町立小屋浦小学校様および、特定非営利活動法人日本ブラインドサッカー協会様に心から感謝申し上げます。

引用文献・引用サイト

- 1) スポーツ庁 (2020) 「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業実践事例集」
<https://core.taiiku.tsukuba.ac.jp/wp-content/uploads/2021/07/7cfe14a7f85239d26abccbdc977a1419.pdf>
(2022年10月31日閲覧)
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科 (2012) 「特

- 別支援教育を推進するための制度の在り方について（答申）」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2017/09/22/1212704_001.pdf
(2022年10月31日閲覧)
- 3) 楠 敬太・金森 裕治・今枝 史雄 (2012) 「児童の発達段階に応じた系統的な障害理解教育に関する実践的研究—教育と福祉の連携を通して—」『大阪教育大学研究紀要第Ⅳ部門』60(2), 29-38
- 4) 文部科学省小学校学習指導要領 (2017)
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/
(2022年10月31日閲覧)
- 5) 全国特別支援教育推進連盟 (2007) 『より良い理解のために交流及び共同学習事例集』ジヤース教育新社
- 6) 内閣府障害者に関する世論調査 (2017)
https://survey.govonline.go.jp/h29/h29-s_hougai/index.html
(2022年10月31日閲覧)
- 7) 小野 聡子・徳田 克己 (2006) 「視覚障害歩行シミュレーション体験が体験者の不安、恐怖心を与える影響—障害者理解教育の視点から—」『障害理解研究』15, 9-20.
- 8) 徳田 克己・水野 智美 (2005) 『障害理解—心のバリアフリーの理論と実践—』誠信書房
- 9) 田口 禎子・林 安紀子・橋本 創一・池田一成・大伴 潔・菅野 敦・小林 巖・三浦巧也・戸村 翔子・村松 綾子 (2012) 「通常教育教員養成における特別支援教育プログラム構築のための基礎的な検討—教師志望大学生の障害者理解と障害理解教育に関する調査—」『東京学芸大学紀要（総合教育科学系Ⅱ）』63, 93-104.
- 10) 山本 哲也 (2003) 「小学校中学年児童を対象とした障害理解教育の実践—「できる」シミュレーションの効果—」『つくば国際大学研究紀要』9, 61-81.
- 11) 西舘 有沙・永田 晴菜・石田 雅人・松井昌美 (2012) 「総合的な学習の時間における視覚障害理解教育モデルの作成1—触察体験を用いた授業の開発と実践—」『障害理解研究』14, 21-34.
- 12) 細谷 一博・清水野 朱・米田 真緒 (2020) 「小学生を対象とした触察体験を用いた視覚障害理解学習の効果」『北海道教育大学紀要（教育科学編）』70(2), 89-97.
- 13) 河内 清彦 (2003) 「障害学生との交流自己効力感汎用型尺度」の妥当性の検討—聴覚障害および視覚障害条件の影響について—」『特殊教育学研究』40, 451-461.
- 14) 河内 清彦 (2006) 「障害者等との接触経験の質と障害学生との交流に対する健常学生の抵抗感との関連について—障害者への関心度、友人関係、援助行動、ボランティア活動を中心に—」『教育心理学研究』54(4), 509-521.
- 15) 田名部 沙織, 細谷 一博 (2017) 「小学生を対象とした障害理解教育における「思考・活動型」授業の実践的研究」『北海道特別支援教育研究』11(1), 1-13.
- 16) 草野 勝彦 (2003) 「改めて体育の可能性を問う—体育でノーマライゼーションの具体化を—」『体育科教育』51(8), 10-13.
- 17) 長曾我部 博・鶴山 匡文・柁木 尚子・草野 勝彦 (2002) 「体育における「インクルージョン」に対する通常学級児童の態度」『宮崎大学文学部紀要芸術・体育・家政・技術』6, 103-115.
- 18) 安井 友康 (2004) 「車いすバスケットボールの交流体験が障害のイメージに与える影響」『障害者スポーツ科学』2(1), 25-30.
- 19) 五十嵐 ひとみ・河合 康 (2014) 「小学校の通常の学級における知的障害の障害理解教育に関する調査研究」『上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要』23, 23-29.
- 20) 東京都 (2022) 「東京 2020 パラリンピック競技大会後の都民意識調査結果」
<https://www.metro.tokyo.lg.jp/tosei/hodohappyo/>

- press/2022/01/28/34.html
(2022年10月31日閲覧)
- 21) 大山 祐太 (2016) 「小学生を対象としたアダプテッド・スポーツ授業の効果の検討」『北海道教育大学紀要 (教育科学編)』66(2), 253-262
- 22) 大山 祐太・奥田 知靖・福原 崇之・越山 賢一・高沢 拓也・沢永 宣之・中川 和彦・佐藤 徹 (2016) 「「アダプテッド・スポーツ」体験イベントの実践報告：大学・自治体・民間が連携した事例」『北海道教育大学紀要』67 (1), 441-455.
- 23) 小玉 京士朗・早田 剛・清水 健太・降屋 丞・桂 秀樹・古山 喜一・河合 洋二郎 (2018) 「ブラインドサッカーによる学生の意識変化に関する研究」『環太平洋大学研究紀要』12, 113-118.
- 24) 大山 祐太 (2015) 「知的障害者のスポーツ活動における指導記録の記述に関する検討」『アダプテッド・スポーツ科学』13, 11-22.